

# 強度行動障害の長男を支える家族

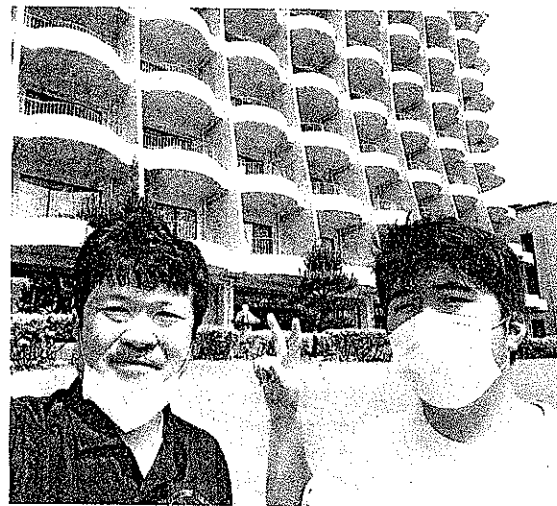
東京都府中市の税理士、金成祐行さん(54)の自宅を訪ねると、広い階段の住宅の4分の1ほどのスペースが、メソネットタイプのフールームマンション風に改装されていた。ここは長男の晋作さん(24)のための部屋だ。晋作さんは全国に約8000人いる強度行動障害の当事者の一人。パニックになる、暴れてしまうことがある。いっつも施設で移転を余儀なくされ、「自助」に追い込まれた家族介護は疲弊だった。「生野由佳

## 自助といわれても

晋作さんは身長177センチ、体重は90キロ超の大柄で、障害の重さを示す支援区分は最も重い「6」の次の「5」だ。  
強度行動障害とは、重度知的障害を伴う自閉症の当事者で、自傷・他害やパニック行動、こだわりが自立した状態で判断することが多い。医学的診断ではなく行政用語だ。

祐行さんが厚生労働省の手引に沿って自宅を改装したのは約5年前。強度行動障害の当事者の「自分のスペース」が必要だった。1階のリビングとキッチン、お風呂があり、2階に学習机とベッド、電子ピアノがそろっている。玄関も別々だ。  
祐行さんは「本当は誰も住みたくなさるかな」としてもお

# 症状深刻 試行錯誤重ね



金成祐行さん(左)と、長男晋作さん。コロナ禍に配慮しながら、家族行事を決め、一緒に出かける時間を大切にしている。一祐行さん提供

しゃれたスペースなんです」と紹介する。「本当は」と説明するのは、晋作さんがパニックで物を投げたり、壊したりしてしまっただけだ。ほろすへての場所に補修テープが張られ、壁が大きくへこんでいたり、破れていたりする。風呂の天井や壁はぐちゃりと崩れていた。  
「パニックになったら冷蔵庫だって、レンジだって、何でも投げてしまいますから。とれだけ買い替えたか分かりません。金成さん夫妻は顔を見合わせる。記憶するだけでも、電子レンジは10台、シャワーのヘッドは5個、電子ピアノは3台。1日電磁調理器は1カ月で使えなくなり、割れたり壊れたりした食器は数知れないという。  
晋作さんは幼少期に自閉症と診断されている。知的な遅れはあったものの、穏やかな性格からか周囲とのトラブルはほとんどなかったという。小学校は養

護学校(現・特別支援学校)に通ったが通学も一人で行きた。当時は近くの団地に暮らし、敷地内の広場で親は同伴せず、自由に遊んでいた。  
変化が見られるようになったのは特別支援学校に通う中学生の後半のころから。強度行動障害の症状は同じころ、思春期に表れやすくなったという。「物を投げたり、人につばを吐いたりするのが主な症状でした。誰かに手を出してしまえば他害はなかったのですが……」と祐行さん。  
卒業後、晋作さんの行動障害は次第に強くなる。「学校で良い子をいっても演じて我慢してしまっていたからかもしれませんでした。そこに気づいてあげられなかった。その後、作業所や福祉施設に通所しましたが、いずれもトラブルで退所し、トラウマ

### 中学後半から発症

変化が見られるようになったのは特別支援学校に通う中学生の後半のころから。強度行動障害の症状は同じころ、思春期に表れやすくなったという。「物を投げたり、人につばを吐いたりするのが主な症状でした。誰かに手を出してしまえば他害はなかったのですが……」と祐行さん。



天井や壁がぐちゃりと曲がった風呂場。何度も補修を繰り返している。東京都府中市の自宅で2020年11月、生野由佳撮影

が重なったように感じています。」「  
強度行動障害に詳しい精神科医、橋端祐樹さん(43)は信州大医学部千代田校の発達医学講座特任助教。「突然こ

んな言葉を何度、浴びせられたか分かりました。晋作さんは3カ所目の施設を退所した後、府中市内で受け入れ先が見つからなかった。昨年1月に決まったのは隣の国分寺市の施設だった。重度訪問介護保険からヘルパーの隣市への移動費は出ないため自費負担はかさんでいく。

### 通行人女性にけが

晋作さんは昨年9月、ヘルパーと近所を散歩中にパニックを起した。  
自転車に乗った女性が車道から歩道へと進路を変更し、晋作さんの前方に現れた。おそろしく晋作さんが想定する「予想」と違っていたのだらう。パニックを起した晋作さんがいきなり女性の顔をたたいてしまった。はたかれた女性のめがねが割れ、けがをした。数分後にサイレンを鳴らしながらパトカーが駆けつけた。

橋端さんによると、当事者の多くは知的障害を伴う自閉症があり、感覚や興味の特異性である一方、周囲の状況を適切に理解したり、言葉で表現したりすることが難しいという。生活の中で、視覚的支援や思いを断えやすいツールを利用するなどし、本人の好む環境や活動を保障しつつ、必要なことは絞って伝えなければならぬ。そのような支援がなると、たまた多数派向けの環境への適応を強要されると強度行動障害のリスクが高まるとい

これはヘルパーから連絡を受け、現場に駆けつけた祐行さんが聞き取った状況だ。この後、祐行さんは対応して入れた府中警察署に強度行動障害当事者への「支援会議」に参加してもらった。昨年11月には府中警察署の担当幹部も交えて、府中市役所の障害者福祉課やヘルパー、家族が集まり、今

後、定期的に開催していきたくてを申し合わせた。  
支援会議では晋作さんに特化した「緊急時マニュアル」を作成した。その項目の一つに、パニックが起きそうな予兆、動作の共有がある。自動改札を通れなかったり、エレベーターに乗れなかったりした後は警戒を強める必要がある。  
パニックにより、誰かに手を上げてしまった場合の対応も盛り込んだ。被害者のけがの有無を最初に確認することや、晋作さんが再びパニックにならないために「晋作さんの肩を抱きながら、被害者の救護を行う」など具体的な共有している。  
祐行さんに許可をもらい、府中市役所に晋作さんの支援会議の意義について聞いた。山田英紀・障害者福祉課長は「支援会議を定期的に行うことで、晋作さんのその時々状態に合った支援方法を検討し、見直ししていきます。地域の方々にとっても晋作さんにとっても、地域生活を安全安心に送るためには、こまめな情報共有と関係機関との連携が大切だと考えています」と話。  
記者も晋作さんに面会させてもらった。こちらから質問を投げかけると、記者の顔を見れば一言返さず、笑顔を絶やさない。初対面で短時間だったからかもしれない。オウム返しが多々、ラリーのような連続した会話は難しかった。  
祐行さんは言う。「晋作はパニックがなければ、いつもニコニコして、おとなしい。本音は適度なんですが、ヘルパーと女性がたまたまヘッドを合わせてゆっくりに歩いてあげると、そんな優しい子なんです。」